

な——んにもない認知症病棟・記録簿の「異食行為」

介護福祉士 中山 早由里

私は、介護福祉士として精神科病院に勤務しています。

第7回「言葉の魔術に騙されない為に」この講義を聞いて思い出したことがたくさんありました。

「寝たきり老人」は「寝かせきり老人」であるという言葉。「日本型福祉」政策が招いた「日本型悲劇」という数々の言葉は・・・かつて、とある講演会で聴いた大熊由紀子先生の言葉でした。

あれから数年が過ぎましたが、私が勤務している精神科病院はどう変わったか・・・何も変わらない現状。確かに以前に比べると、認知症病棟で身体拘束は減りました。

しかし私物庫は今もなお存在し、「私物を奪い、スタッフが管理しているおかしさ」は続いており、それをおかしいと思わないスタッフ。

そんな私に今回の講義でハッとさせられたのが、プロフェッショナルとは①行動力②想像力③度胸でした。

その通りです。私には出来なかった・・・行動力と度胸のなさをしみじみ実感しました。精神科病院の在り方を様々なネット媒体で訴えてみたものの、実際現場ではどうであったかと自己反省です。

「これじゃ駄目」と嘆くのではなくて「さあ、こうやって行きましょう」という言葉掛けが必要でした。行動力がなくて・・・は言い訳なのですね・・・。

湧き上がる思いを胸に収めていても始まらないのだと強く感じます。

私物庫をなくす事ができなかった認知症病棟。

な——んにもない認知症病棟でな——んにもやる事がなく、無理矢理脱がされてお風呂場で体を洗わされて、回廊式廊下で放尿を繰り返すからと、オムツを付けさせられて、つなぎ服を着せられた人の顛末は、つなぎ服を袖口から食べる行動でした。椅子やテーブルの脚の木の部分を食べる事でした。

精神科医師の記録やナースの記録簿には「異食行為」と。

「ディメンシア」と呼ばれる人々の「異常な行動は、異常な環境と異常なケアへの正常な反応」まさしくその通りです。

その人から全てを取り上げたのは私達スタッフです。何が介護か介護福祉士かと自問自答の日々です。

差別のない社会も排除しない社会も・・・すべてはスタッフの言葉から始まるという事ですね。行動力、その勇気を。。ありがとうございました。